

南和の医療は南和で守る



南和広域医療企業団南奈良総合医療センター
事務局長 岡 眞啓

1. はじめに

奈良県の南和地域をご存じでしょうか。

紀伊半島の中央に位置する奈良県の中で南和地域には、桜で有名な吉野山、降雨が多く山全体が特別天然記念物に指定されている大台ヶ原、修験道・山岳信仰の大峰山、村としては日本一面積の広い十津川村、日本一の柿産地の五條市などがあり、県面積の約65%を占めています。一方、人口は県全体の約5.5%（約73,000人）に過ぎず、人口減少と高齢化が進んでいる過疎の地域です。



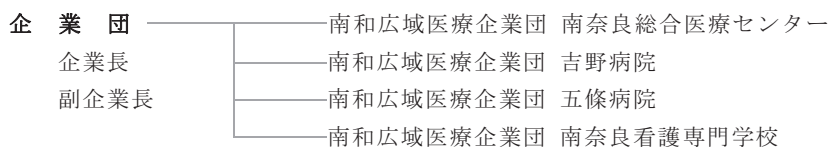
正面玄関に設置

従来、この地域には、同規模の公立3病院（県立五條病院・町立大淀病院・国保吉野病院）が存在し、地域医療に携わってきましたが、患者数の減少とそれに伴う医療スタッフ（医師・看護師）の減少により、さらに患者数が減少するという悪循環が生じ、厳しい医療体制とともに経営的にも非常に困難な状態に陥っていました。平成18年に発生した、受け入れ病院が見つからず搬送中に妊婦が死亡するという事件を機に南和地域の医療体制についての協議が始まり、平成22年には、「南和の医療等に関する協議会」が設置され、「南和の医療は南和で守る」を基本理

念として、医療機能が低下している3病院を1つの救急病院と2つの地域医療センターに統合・再編する構想が検討されてきました。

平成24年に総務大臣の許可を得て、奈良県と五條市・吉野町・大淀町・下市町・黒滝村・天川村・野迫川村・十津川村・下北山村・上北山村・川上村・東吉野村の13の地方公共団体（構成団体）をもって「南和広域医療組合」が設立されました。新病院の整備には、病院事業債（特別分）の起債に加え、地域医療再生基金事業費補助金及び医療施設耐震化促進基金事業費補助金などを活用することとし、総事業費196.6億円の再編事

南和広域医療企業団の組織図



(※以下、「南和広域医療企業団」の名称を省略)

業が本格的にスタートしました。ハード整備については、構成団体の各首長のご理解を得てスムーズに進みましたが、ソフト面で、特に苦慮したのが職員の身分移管についての進め方でした。県職員と2つの町職員で異なった人事・給与制度を1つの制度にまとめるため、職員のヒアリング・意向調査など行いました。

南奈良総合医療センターの開院により、本格的な病院経営へ移行するにあたり、地方公営企業法の全部適用とすることから、平成28年2月に総務大臣の許可を得て、4月からは、名称を「南和広域医療企業団」とし、専任の企業長を配置しました。

2. 病院の紹介

～南奈良総合医療センター～

平成28年4月1日、吉野郡大淀

町大字福神の地に急性期から回復期医療を担う南奈良総合医療センターが開院しました。最寄りの近鉄福神駅からは約8mの高低差を解消するためにエレベーター棟・歩道橋が設置され、雨の日でも濡れることなく駅から病院にたどり着くことができます。

病床数は232床(一般病床188床、回復期リハ病床36、HCU 8床)で、25の診療科と専門医療をチームで提供する9センター機能を有し、「まごころをこめて、良質で患者・家族のみなさまにとって最適な医療」を提供しています。

医師については57名(正規51名・嘱託6名)を配置(平成29年4月現在)。特に、救急センターにおいては断らない救急を目指し、24時間365日救急搬送を受け入れられる体制を構築したことにより、南和地域での救急搬送患者

受入件数が前年(公立3病院)に比べ倍増するなど、地域住民が安心して生活できる医療が提供できるようになりました。また、平成29年3月から運航を開始した奈良県ドクターヘリが、南奈良総合医療センターに常駐することになり、これまで救急車で最大2時間程度要していた山間地域からの患者搬送も約15分程度に短縮されるとともに、医師による治療が早期に行われることで、患者の救命率の向上に繋がっています。

南奈良総合医療センターには、脳卒中などの際の血管造影検査に使用するバイプレーン血管造影装置と腹部・四肢領域の診断能向上と治療のためのIVR-CTを同室に設置した世界初のシステムを取り入れました。また、旧五條病院から移設したMRIをバージョンアップするとともに最新型128



南奈良総合医療センター



ドクターヘリ



IVR-CT カテーテル血管造影装置

スライスCTも併せて設置し、診断・治療に活用しています。

全国的に産婦人科医の確保に苦慮している状況は南和地域においても変わらず、企業団でも常勤医師1名を確保するのが精一杯でした。そこで、奈良県立医科大学附属病院（メディカルバースセンター）と連携し、妊婦検診のため助産師の応援をいただくとともに、双方で同じ周産期システムを導入して、診療情報をリアルタイムで共有することによって、検診は南奈良総合医療センターで行い、出産は奈良医大でしていただける体制を構築しました。

南和地域は過疎化が著しく医療の確保が困難となっています。いわゆる「へき地」の住民に対する医療の提供や診療所への応援などの事業を円滑かつ効率的に実施するために置かれる「へき地医療支援機構」を奈良県から受託し、専任の担当官を中心に企画・調整を行っています。また、無医地区への巡回診療、診療所への代診医の派遣、医療従事者の研修・養成などを行う「へき地医療拠点病院」の指定も受け、へき地における住民の医療を確保・支援しています。

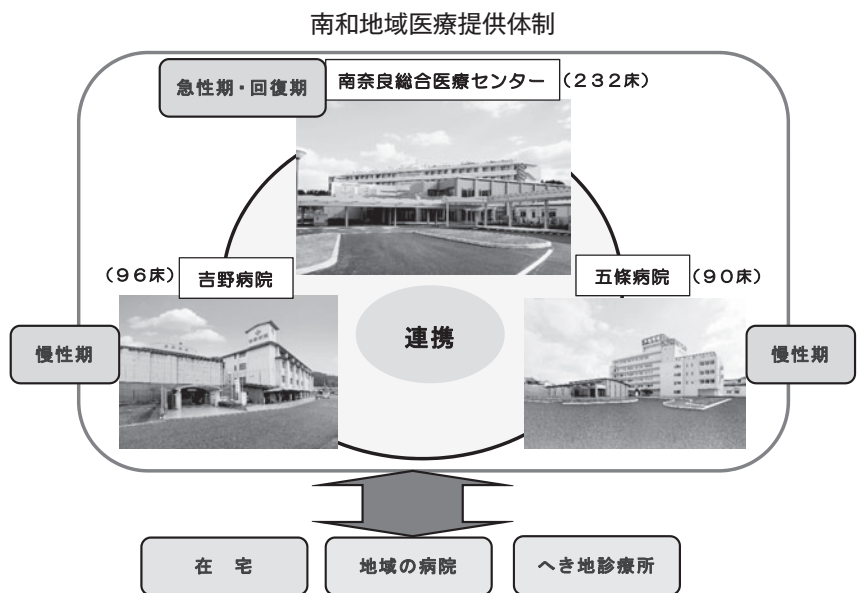
また、公立のへき地診療所と医療情報ネットワークシステムで連携することにより、電子カルテの共有やテレビ会議などを行って医療提供体制の強化を進めています。

また、「災害拠点病院」の指定を受けている南奈良総合医療センターは、免震装置を有し、震度7にも対応できるよう設計されているため、今後発生すると予測されている東海・東南海・南海地震の際にも災害拠点病院としての役割を發揮することが期待されています。平成28年4月に発生した熊本

地震発生時においては、開院早々でしたが、DMAT隊が出動し、また日赤医療救護班に参加するなど災害派遣にも積極的に取り組んできました。現在、大規模災害に備え、職員向けの机上訓練を行うとともに消防隊・警察・交通公共機関・ドクターヘリ・防災ヘリなどと連携を図り、定期的な訓練を行っています。

～吉野病院・五條病院～

南奈良総合医療センターと同時に開院した吉野病院（病床数96床（一般50床（うち、地域包括ケア病床15床）、療養46床））と平成29年4月にリニューアルオープンした五條病院（病床数90床（一般45床、療養45床（休床中）））はそれぞれ内科・整形外科の2診療科体制で慢性期医療・在宅医療を中心として、地域住民に医療を提供しています。



※ 南和広域医療企業団の3病院（合計病床数418床）がそれぞれの役割を分担し、急性期から回復期、慢性期までのシームレスな医療を提供する体制が整いました。

3. 経営管理

南和地域のみなさんが、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられる医療を提供するとともに、企業団が安定した経営を継続していくためには、企業団が有する「ひと（専門性が高い医療者など）」・「もの（最新の施設・医療機器など）」の資源を最大限に活かした活動を続ける必要があります。そこですべての診療科・医療センターと部門がそれぞれの目標とそれを達成するための具体策を「アクションプラン」として取りまとめました。これを全職員が共有し、実行することで、良質で最適な医療を提供するとともに、安定的・継続的な企業団経営に繋げたいと考えています。

また、情報共有の場として、病院ごとの定例会、3病院合同での拡大定例会に加え、運営委員会(3

病院長・看護部長・事務長)を定期的に開催するとともに、四半期に一度、外部委員を交えての経営企画委員会を開催し、診療状況・経営状況をもとに経営分析を行うなど病院運営についての検討を行っています。

企業団発足から1年が経過しましたが、これまで以上に情報共有し、職員が一丸となり南和地域の住民の方が安心して暮らしていただけるよう充実した医療の提供と経営の質の向上を目指しています。

4. おわりに

私自身この南和地域に住む住人のひとりです。奈良県職員に採用され、最初の勤務部署が県立五條病院でした。それから異動を重ね、企業団の前身の南和広域医療組合に派遣され再編事業に携われ

たのは単なる偶然ではないように思います。現にこの地域で生活しているなかで、医療に対する不安はなくなりました。24時間365日安心して生活ができています。

今後、この南和の医療体制を維持していくためにも、医師・看護師等多くの医療従事者が南和広域医療企業団の3病院に勤務したいと思うような魅力のある病院を目指して、職員ひとりひとりが「医療従事者」として日々自己研鑽し、その成果を全国に発信してまいりたいと思います。

最後に、奈良県と言って連想するのが、大仏・鹿ですよ。冒頭にも書かせていただきましたが、自然がいっぱいの丘陵地に立っている南奈良総合医療センターには是非一度来てください。都会では出会うことの出来ない感動がありますよ。



事務局職員（平成28年4月）



竣工式典（平成28年3月）の私です

